

著作奨励賞

古村学『離島エコツーリズムの社会学—隠岐・西表・小笠原・南大東の日常生活から』
(吉田書店 2015年)

<講評>

本書は、著者がこれまでに調査してきた離島（隠岐・西表・小笠原・南大東）におけるエコツーリズムの調査をまとめた文化人類学的研究で、2009年に大阪大学に提出した博士論文を基にしている。

エコツーリズムの特徴として、「自然保護というグローバルな価値観がローカルな地域社会の現場に立ち現れる」(p. 60)とし、ローカルで培われた独自の自然観とグローバルな価値観の間に見られる「合致、対立、葛藤という多様な関係」に着目し、それぞれの島において住民がどのようにエコツーリズムをとらえているかを重視した報告となっている。こうした視点を支える概念として本研究が採用しているのは、「生活環境主義」である。これは、自然保護に対する2つの対立する立場（科学技術による自然利用を肯定する立場と、環境変化を避け原生自然の維持をめざす立場）のどちらとも異なり、「当該社会に居住する人びとの生活の立場」を重視するものである。そこでは、一見ツーリズムとは無関係に思える島でのさまざまな生活を含めて調査し、これによって得られた知見とあわせながら、エコツーリズムに関する「ふつうの人々」の言葉の解釈を行うという研究方法がとられる。

こうした視点と手法により、本書では、従来のエコツーリズム研究の多くにみられるエコツーリズムが実践されている地域でのツーリズム関係者の意見や活動に焦点がおかれた調査とは異なる、より幅広い地域住民を含めての「エコツーリズムに対する態度」が明らかにされており、この点は、本研究のすぐれた点と言える。しかし、4島での調査は、異なる時期に主に偶然得られた機会によって研究対象とされており、その比較からエコツーリズムの既存の研究視角を問い直すような示唆を引き出すというよりは、既存の研究視角に基づくそれぞれの事例の調査結果が並べられているという印象も受ける。ただ、そうした弱点はあるものの、エコツーリズムというレンズを通して離島地域を描き出すことに成功した労作であり、著作賞・奨励賞いずれにおいても、受賞に問題ないと考えられる。